

巻頭言

高橋 清久

国立精神・神経センター武蔵病院

日本時間生物学会が誕生して3年目を迎えた。温かい感触を与えてくれる橙色の会誌が一冊また一冊と次第に数が増えていくのを見るのは楽しみである。

言うまでもないが、この会は生物リズム研究会と臨床時間生物学研究会が統合されて発足したものである。前者は10年の、後者は8年の歴史がある。したがって実質この時間生物学会の歴史は揺籃期は過ぎていたものである。このように短いながらもそれぞれがそれなりの歴史を持つ研究会が統合されたことは、我が国の時間生物学研究のさらなる発展をもたらすに違いない。最近、他の分野でも新しい研究会や学会が発足することが多いが、その多くは既存の学会からの分離である。私の身近で実例を挙げると、臨床薬理、アルコール精神医学、病態精神医学などがある。おそらく私の目にふれない新しい研究会や学会が数多く存在するであろう。このように分離が一般的であり、その方が容易であるのに、本学会があえて困難を克服して統合したことの意義は大きい。

統合によるメリットには多くのものがあるが、最大のものは相互の交流が活発になることであろう。基礎研究者と臨床研究者との統合であるから、相互の知識やアイデアの交換はそれぞれの研究に益するところが大きい。特に臨床研究者にとっては基礎研究の進展の現状に直接接することが出来るのは、生体リズムの基礎にある機構を正しく理解できると同時に新しいアイデアを得るよい機会となる。臨床家が自己の研究を進める上でその基礎にあるものを正しく理解していることは、研究の正しい方向性を保つ上できわめて重要である。一方、基礎研究者にとっても臨床研究の動向を直接知ることは有益なことであろう。研究の意義は「真実の探求」と同時にまた「人類の幸福に寄与する」ことである。直接、人々の健康や疾病に関連する臨床研究の先導役としての基礎研究は人々の生活の質の向上に大きな貢献をしているのである。自己の研究成果の波及効果を目にすることは、基礎研究者にとって、真実を知る喜びと同様に貴重な事柄であろう。

時間生物学は大きく二つの方向性を持っている。ひとつは分子生物学、遺伝学的な時計機構の解明であり、他方は健康人の生活を含めた臨床研究である。それぞれの方向性を持った研究者が一堂に会して議論を行うことは正しい研究の発展を加速させるであろう。本年11月に行われる第3回の日本時間生物学会のテーマは“時計遺伝子から時間治療まで”であり、これこそまさに本学会のあり方を端的に表すものであり、このテーマを選ばれた学術大会会長に敬意を表したい。